

東北大学史料館だより No.31

著者	東北大学学術資源研究公開センター史料館
雑誌名	東北大学史料館だより
巻	31
ページ	1-8
発行年	2019-09-10
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133053

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



(上) 高橋里美自筆原稿「世界文化と日本文化」(成立年など不明)
(右) 高橋里美ほか写真(会合の際か、撮影年月日など不明)
ともに東北大学史料館所蔵



Index

- 2 二つの学校史研究に携わって
-館長就任のご挨拶に代えて-
東北大学史料館長 安達 宏昭
- 4 和綴じ冊子史料に見る東北大学における哲学研究の伝統
東北大学文学研究科助教 遠藤 健樹
- 6 資料の公開について
史料館のうごき
- 8 お知らせ
 - ・史料館の改修と2階展示室の閉鎖
 - ・史料館が担当するホームカミングデー企画のご案内
 - ・片平まつり2019「探検しよう!科学の森」を共催
 - ・「(仮)西澤潤一と東北大学展」の御案内

「全体の立場」に「包まれた」話

戦後最初に選ばれた総長の高橋里美(1886-1964)は、西洋哲学を専門とする文科系の学者でした。独特の「高橋哲学」で知られ、西田幾多郎や田辺元といった日本を代表する哲学者にも、一歩も引かず論争を行いました。その哲学論の要点は、存在するものの究極は「愛」であり、愛の特色は一体となること、全体が一つになることによって相手を包んで越えていくことが本当の愛である、というものです。「一在愛」「包越」などのキーワードによって説明され、当時流行していた弁証法のような、相手との対立を闘争により克服し新たな境地に至るという発想には与しませんでした。

こうした議論を自然に行えるほど、高橋総長は人格者として知られていたのですが、一方で多くの個性的なエピソードが伝わっています。哲学研究室の人々が御自宅に集まり議論をしていたところ、夫人が現われ「あるじは愛の哲学というけれど、ちっとも愛じゃない、私などちっとも愛されておられません」と言ったので、皆がどっと笑い、高橋総長も照れ笑いしたという話(石津照璽「高橋先生の愛情」)。「愛」の意味を尋ねた学生が、言下に「女と抱き合った経験を考えてみればよい」と言われて狼狽したという話(渡辺義雄「師としての高橋先生」)。タイトルの話は河野與一が、フランス文学の助教授から西洋哲学史の教授に昇進したときの回想に出てきます。「トウの立った助教授に芽を吹かせてやろうとなさった」当時の高橋学部長の「温情に発する強要」に「ひねくれ者の私(河野)が折れた」とき、ある友人が冷やかした言葉だそうです(河野「高橋里美さんのこと」)。

二つの学校史研究に携わって ——館長就任のご挨拶にかえて——

東北大学史料館長 安達 宏昭



2019年4月1日に史料館長に就任しました、文学研究科の安達宏昭です。専門は、日本近現代史です。主たる研究対象は近現代日本とアジアの関係ですが、戦時期の動員体制の研究や、戦前・戦後の国土計画なども研究テーマとしております。日本近現代史を専門とすることから、これまで、母校の立教学院の歴史や、東北大学の歴史について研究や教育に携わってきました。今回、史料館の運営に参加するにあたって、史料館の働きがどのような意義を持つのか、私の研究活動の経験から確認し、その機能や活動がより充実するように尽力したいと思っております。

私が東北大学の歴史研究を始めたのは、2003年の着任と同時でした。当時、100年史の編纂事業が本格化しており、その通史編の執筆に加わることになったのです。私が担当することになった章は、第2巻通史二において最も新しい時期を扱う「国際交流と産学連携」「キャンパス移転」でした。特に「キャンパス移転」については、2006年に青葉山県有地を県から購入する契約が成立した段階で、進行中の事柄でした。こうした同時代的な事象については、なかなかその経緯を俯瞰することは難しいのですが、評議会議事要録を利用することができたことにより、添付された資料などに基づいて叙述できました。

1992年に移転問題が浮上したときには、片平・雨宮キャンパスをすべて売却して、その機能を青葉山県有地に移すことが企図されていきました。しかし、県有地の返還問題が長期化するなかで、2002年に片平キャンパスの全面移転方針が転換され、さらに売却予定地が次第に減少していったのです。この方針転換は、現在の東北大学の在り方にも大きな影響を与える画期的な政策決定であり、その要因を説明することが、この章を叙述するうえで、重要なポイントでした。評議会の記録には、片平キャンパスにある歴史的建造物を保存しようという市民的な要望が一つの要因であることを、明確に記していました。

1998年に、2人の仙台市民により「片平たてもの應援團」が発足し、1年で110名の会員が集まり、片平キャンパスに現存する近代建築群の保存・活用にむけて、ごみ拾いや勉強会、そして産業考古学会が認定する「推薦産業遺産」に推薦する活動を展開していました。この会の活動が、大学に建築物の歴史的な重要性をあらためて認識させ、会の代表が、片平キャンパス歴史的建築物保存再生利用検討ワーキンググループの委員に選任され、政策判断に影響を与えたのです。史料館の建物も、この時に保存活用することが定まりました。こうした研究の成果から、大学の記録がしっかりと残されていて利用できることや、地域社会のなかで大学の方向性を考えることの重要性を確認することができたのです。とりわけ、片平キャンパスの今後の在り方を考える際には、この時の方針転換した要因を基礎にする必要があると考えています。

母校の立教学院史の研究に本格的に取り組むようになったのも、東北大学着任直後からでした。ちょうど1999年に立教学院125年史事業が終了し、立教学院史資料センターが設立され、立教史関係資料の収集・整

理・保存とその研究が開始されていました。2001年からは、研究プロジェクト1「立教学院と戦争に関する基礎的研究」が始まり、科研費にも採択されて共同研究が本格化しました。私は東北大学に着任する前は、立教池袋中学校・高等学校の専任教諭として125年史編纂に加わっていたので、継続して、このプロジェクトに参加して、戦時期の立教中学校の研究に取り組むようになったのです。

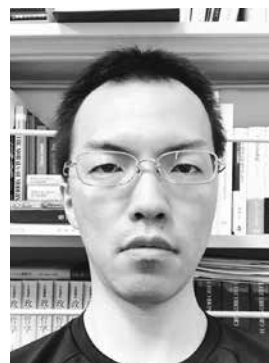
立教池袋中学校・高等学校の学校史料室に保管されていた戦時期の史料を、しっかりと調査して驚きました。1930年代半ば以降、戦時期から占領期にかけての史料が大量に保存されていたのです。125年史編纂では、私が担当したのは戦後の部分だけで、校務が忙しく、戦時期の史料はよく見ていませんでした。その史料群は、『教務日誌』だけでなく、東京府学務部（後に東京都教育局）とのやり取りの文書を綴った簿冊である『官公往復文書』『報告書類』や、教育局からの通達をまとめた『諸通達綴』や勤労働員関係の書類などで、公文書を含む多様な記録がキャビネット2つにびっしりおさめられていました。

これら立教中学校に関わる史料は、1953年から1995年まで社会科教諭であった伊藤俊太郎先生によって、収集・整理がなされてきたものでした。伊藤先生は、着任後しばらくして、当時の校長に立教中学校の記録を保存し校史をまとめる任務を委ねられたようで、以後、校内誌において立教中学校の詳細な歴史を連載し、『立教中学校100年史』の大部分を執筆されました。あるとき、伊藤先生は、私に対して、この戦時期の大量の史料を保全した際のエピソードを教えてくださいました。学校史の調査に携わるようになった後に、学校内にあった焼却炉の前をたまたま通りかかったところ、大量の段ボール箱が横に積み上げられていて、いまにも焼却が始まろうとしていたそうです。気になって、箱を開けてみたら、それらの戦時期の史料が入っていて、その保存の重要性を説明して、急遽、焼却を中止してもらい、自分が顧問をしていた文芸部の部室に持ち込んで保管し、のちに史料室を作ってもらい保存してきたとのことでした。こうして戦時期の大量の史料は、伊藤先生の史料保全の尽力と偶然も重なって保存されることになったのです。この立教中学校の戦時期の史料は、大変、貴重なもので、管見の限り、公文書館を含む他の場所には、ほとんど残っていないものばかりです。大量の史料を利用することで、私は伊藤先生が描いた戦時期の立教中学校とは異なる歴史像を提示することができましたし、さらに通達された公文書を使って、東京府（都）の行政指示や、勤労働員政策の詳細な経緯と実態を解明することができました。このように大量の史料が残されたことにより、学校の歴史だけでなく、社会全体の状況を明らかにすることができたのです。

これらの2つの学校史研究の経験から、大学の諸記録を保存・整理・公開するということが、きわめて重要な働きであることが確認できたと思います。史料館の基礎的な役割は、まさにこれらの働きを行い、記録を通じた検証や、組織等の今後の判断につなげる分析の基盤を担うことです。それは、研究や教育への活用につながるとともに、大学の現状をより広い視野から捉え、社会に貢献する意義をもっていると思います。これらの役割を果たすためには、皆様のご支援とご援助が必要です。ご協力をお願いする次第です。どうぞよろしくお願い致します。

和綴じ冊子史料に見る 東北大学における哲学研究の伝統

文学研究科倫理学研究室助教 遠藤 健樹



東北大学文学研究科哲学倫理学合同研究室には長らく和綴じの冊子が保管されてきた。これは1931年2月18日から1963年にかけて記された合同研究室内の活動記録である。冊子が作成されてから90年近くが経とうとしており、史料価値が高いにも拘らず保存状態はあまり芳しくない。折から史料館で企画展「西田幾多郎と東北大学ゆかりの人々」が開かれることになり、東北大学における哲学研究の伝統に改めて光が当たった。これをよい機会に、くだんの冊子を東北大学史料館に預かっていただくことにした。納庫を前に、史料館だよりの紙面をお借りして、戦前から戦後への移行期に書かれた内容について簡単ながら紹介することにした。

冊子に記載されているのは、年度ごとの教員の陣容、講演会や研究会の報告、あるいは遠足のような研究室行事についての覚書である。冒頭には、小山鞆絵（ヘーゲル研究、1884-1976）、石原謙（キリスト教哲学研究、1882-1976）、武市健人（ヘーゲル研究、1901-1986）、木場深定（ハイデガー研究、1909-1999）、本多修郎（科学哲学・科学史、1909-1990）といった研究室メンバーの署名が認められる。いずれも我が国における哲学研究に重要な足跡を残すことになるひとびとであった。

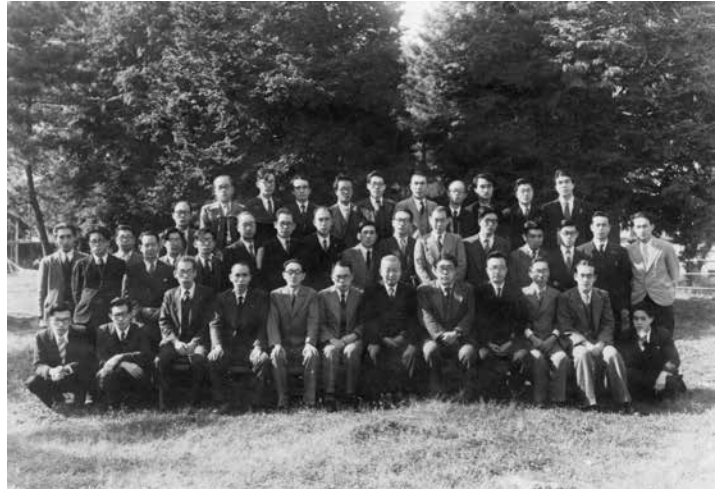
講演会や研究会の記録は、当時の哲学研究の状況を知る上で参考になるかもしれない。たとえば、31年秋から翌春2月にかけて、独和辞典の編纂で名の知られることになるロベルト・シンチンゲル（Robert Schinzinger 1898-1988）が講師として滞在していたことが確認できる。彼は32年2月6日、仙台を離れる直前に開催された哲学例会で、「獨逸哲学現状」と題した特別公演を行なったようである。送別会の会場なども併せて報告されており、知的交流の賑やかさ、闊達さを思わせる。

こうした記録は継続的につけられているものの、年によっては断絶がある。たとえば、35年前後の報告は欠けている。このたび史料館で開かれた企画展では、同年9月25日から西田幾多郎を招いて講演会が行われたことが紹介された。しかし、残念ながら同講演に関する報告は見当たらなかった。また、36年秋から41年にかけて、ハイデガーの高弟であったカール・レーヴィット（Karl Löwith 1897-1973）が講師として在任しているが、これについての報告も特に残されて



（写真1）

いない。ただ、何枚かの写真がとじ込まれており、なかにはS15と但し書きの付されているものがあつた（写真1）。昭和15年を指すものと思われる。最前列向かって左端に高橋里美（第九代東北大学総長、当時は哲学第三講座担当）が座っているが、その右隣で渋面を作っているのがレーヴィットである。なお、レーヴィットの更に右隣には石原（当時は哲学第二講座担当）がおり、研究室の主だったメンバーが揃っていることが確認できる。



(写真2)

仮にこの写真が昭和15年すなわち1940年のものとすれば、撮影されたひとびとの多くは政治状況の悪化を身に迫って感じていたのではないか。たとえば、先述の本多はこの年の1月に起こったいわゆる「唯研事件」第二次一斉検挙で難に遭っている。日米開戦とともに冊子の記録は全体的に散漫になっていくのだが、哲学研究者の日常にも迫る危機に起因してのことであつたことは想像に難くない。

記録は敗戦の直前頃からふたたび活性化してくるが、本格的なものになるのは48年頃からであろうか。この年には本多が復活、6月に「呪術と科学」という研究発表を行なったようである。また、東北地方の哲学研究者を対象にして研究発表と交流の場を設けた東北哲学会も、この年に発足している。東北哲学会第一回大会は48年11月12日・13日に、第二回は51年10月26日・27日・28日に開催された模様である。第二回ないし第三回の東北哲学会で撮られたと思しき写真も残されていた（写真2）。高橋を最前列中央に置き、多くのひとびとがその周囲を取り囲んでいる。戦争と相前後して研究室を導いてきた彼の人望をうかがわせるものであろう。その向かって左隣には、東北大学における科学哲学研究に大きな足跡を残した三宅剛一。同じく最前列向かって左端には、東北大学に依りメルロ＝ポンティ研究を領導した若き日の滝浦静雄の姿もある。戦中、東亜共同体論への参画ののち挫折を経験し、再起を図っていた船山信一（京都大学出身だが、当時は河北新報論説委員）も学会の重要なメンバーとして列席している。

初回の東北哲学会プログラムには会員の名簿も付されているのだが、時節柄、卒業生会員には「死亡」や「在シベリア」と記されているものも少なくない。幾多の困難な時を経て、会員一同哲学研究の再興を期したことが偲ばれる思想史的史料と言えよう。

以上、手短ながら、和綴じ冊子の内容を紹介してきた。筆者が触れたことがらに重要な意義を認める向きもあるかもしれないし、触れられなかったことがらから新たな発見もあるかもしれない。アーカイブの一部となることで、本冊子を利用する機会は多くのひとびとにひらかれる。これにより、東北大学における哲学研究の伝統、ひいては、戦前から戦後にわたる日本の哲学研究に新たな光が投げかけられることを祈念してやまない。

資料の公開について.....

◆特定歴史公文書等

2019年（平成31年）3月31日付で新たに888点の特定歴史公文書等の公開を開始しました。今回新たに公開された主な文書は下記の通りです。

①歯学部文書

昭和52年度～62年度の教授会・大学院研究科委員会・運営委員会の議事録など。

②流体科学研究所文書

高速力学研究所時代のものも含めた、昭和33年から昭和63年度にかけての教授会議事録など。

③附属図書館文書

昭和33年から平成13年にかけての附属図書館商議会議事要録など。



歯学部文書



流体科学研究所文書



附属図書館文書

◆個人・団体文書

①服部英太郎・文男文書

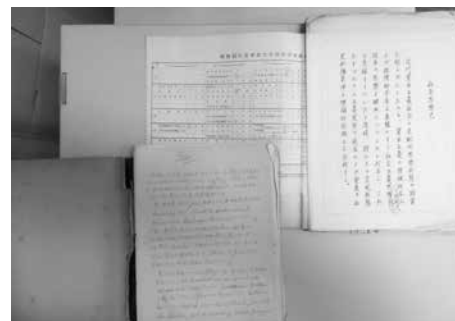
服部英太郎関係が1149点、服部文男関係が419点、合計1568点の文書群です。

服部英太郎は（1899-1965）、第三高等学校卒業後、東京帝国大学を経て、1924年に東北帝国大学法文学部に赴任し、経済学第五講座（社会運動史・社会政策）を担当しました。1935年に教授昇任、戦前の思想弾圧の中1942年に辞職、戦後1946年に復職し1962年に退官。研究業績は服部文男らにより編集された『服部英太郎著作集』全7巻（未来社）にまとめられています。

服部文男（1923-2007）は英太郎の子息で、第二高等学校や東京帝国大学を卒業後、1952年から1987年まで東北大学に奉職（1970年に教授昇任）。主著として『マルクス主義の形成』（青木書店、1984年）等があります。

文書群の内容は、研究・教育に関わるものとして講義ノートや論文原稿等、学内関係では、イールズ事件や学生運動に関するものが含まれます。また、英太郎関係では、昭和30年代に参与した科学者待遇改善運動に関するもの、文男関係では、学外での労働教育に関するものも含まれます。

本史料は服部文男氏から1977～87年の3度、さらに服部文男門下生の大村泉経済学部教授（当時）から文男氏の没後と、4度に分けて寄贈されました。



史料館のうごき（2019年3月～8月）

◇第8回アーカイブズセミナー（講師：菊谷竜太 京都大学特定准教授）を開催しました。（3月27日）

◇柳原敏昭館長と村上麻佑子学術研究員が退任しました。（3月31日）

◇安達宏昭館長と津上麻衣子事務補佐員が着任しました。（4月1日）

◇新公開資料速報展を開催（4月1日～6月30日）

整理が完了し、新たに公開された資料を紹介するミニ展示として、第28回「二高精神のベースボール－尚志会野球部・五城倶楽部関連資料－」、第29回「父子で挑んだ社会思想史研究－服部英太郎・文男文書－」を開催しました。

◇2019年度の法人文書の受入・評価（4月15日～6月21日）

2018年度末に保存期間を満了した法人文書の中から本学の「特定歴史公文書」として355点（予定外の追加移管を含まない）の法人文書を当館公文書室に受け入れました。あわせて2019年度末に保存期間を満了する予定の文書の評価を行い、移管予定となる文書を403点選定しました。引継を完了した文書については、今後、内容などに関する点検調査を行ったのち公開する予定です。

◇ミニ企画展「大正・昭和のはじまりと東北帝国大学」を開催。（5月17日～6月27日）

◇学術資源研究公開センター展示「大学を探検しよう！」を共催（7月1日～19日）

総合学術博物館・植物園と合同で、各館園の活動紹介を主とし、秋に開催する「（仮）西澤潤一と東北大学」展の一部も先行展示しました。会場は、附属図書館のご厚意により、本館1号館エントランス展示スペースをお借りしました。

◇企画展示「西田幾多郎と東北大学ゆかりの人々」（7月1日～31日）

今年は秋に予定される改修に対応し、秋から7月に期間を移して企画展示を開催しました。昨年、石川県の西田幾多郎記念哲学館との共催とすることで準備を進めており、史料館所蔵の資料に加え、同記念館や東北大学附属図書館の資料をあわせ、45点を出陳しました。また期間中に片平キャンパス内「さくらホール」で公開講演会を開催し、東北大学名誉教授の野家啓一先生が「東北大学と科学哲学の伝統」、史料館の加藤諭准教授が「東北帝国大学草創期における法文学部」の題で講演を行いました（参加者100名）。講演会の前にキャンパス・ツアーも開催し、25名が参加しました。



【重要なお知らせ】

史料館の改修と2階展示室の閉鎖／一部展示移転について

今年8月より半年間、東北大学史料館（地図D02）の耐震工事を行うことになりました。それにもない、再開準備期間を含め、来年4月まで2階展示室を閉鎖することになりました。一方、1階については特に変更なく通常業務を行います。

- 魯迅記念展示室に限り、代替展示室（地図B04「本部棟3」1階）において10月中旬から展示を再開します（詳細はHPなど参照）
- 事務室は、期間を通じて業務を継続します。
- 閲覧室における資料公開も、通常どおり継続します。



史料館が担当する ホームカミングデー企画のご案内

2019年9月28日(土)～29日(日)の東北大学ホームカミングデーにあわせ、以下のイベントを開催いたします。

①片平で行うキャンパスツアーと「写真でたどる東北大学」

片平北門会館2階で、1960-80年代の地図や航空写真のパネル展示を見ながら懇談して頂ける場が設けられます。

9月28日(土)	10:00～11:00	キャンパスツアー
	11:00～11:30	イベント「写真でたどる東北大学」
	11:30～15:30	自由開放
9月29日(日)	10:00～11:00	キャンパスツアー
	11:00～13:00	自由開放

②川内で行うミニ講演「30分でわかる東北大学の歴史」(28日13時から)ほか

東北大学附属図書館本館多目的室を会場とする、附属図書館・植物園・埋蔵文化財調査室と合同の特別イベント「東北大学の過去から現在へ」(9月11日～10月3日開催)において、史料館担当のミニ講演や資料展示を行います。

東北大学附置研究所等一般公開

片平まつり2019「探検しよう!科学の森!」を共催します

2019年10月12日(土)～13日(日) 10時～16時 史料館テーマ「仙台最初の留学生～魯迅と仲間たち～」

体験コーナー: めざせ!東北大学歴史博士／マシン・ボート体験

全体企画「片平キャンパス歴史散歩」(13日10時半～)も担当

東北大学総合学術博物館と「(仮)西澤潤一と東北大学」展を共同開催します

2019年10月7日(月)～11月1日(金)

会場: 宮城県庁18階 県政広報展示室

共催: 東北大学電気通信研究所ほか関係部局など

内容: 半導体研究の世界的権威で、東北大学第17代総長も務めた西澤潤一(1926-2018)の生涯と研究を紹介

東北大学史料館だより 第31号 2019年9月10日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1 TEL 022-217-5040

E-mail desk-tua@grp.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/> Twitter @T_U_Archives